

令和7年度 学校経営計画に対する自己評価計画書

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
1 基本的な生活習慣の確立(挨拶の励行、規範・安全意識の確立、清掃の徹底)	① 教職員が率先して挨拶に取り組み、礼儀正しく、元気で活発な生徒を育成する。	生徒指導課 総務課 生徒会課 各学年	5月に全校生徒挨拶練習を行っている。生徒会、各部、学年に呼びかけ挨拶週間を設け、登校時の挨拶運動を計画している。挨拶の励行をとおして、生徒のマナー向上を目指している。	【満足度指標】(保護者)挨拶練習、挨拶週間の取組により、すすんで挨拶する生徒が増えている。	生徒がすすんで挨拶していると思う保護者が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 85%以上である。 D 85%未満である。	Dの場合は、挨拶運動の取組の拡充を再検討する。	7月、12月に調査
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規範意識の向上を図る。	生徒指導課 各学年	登下校時に制服を正しく着用しない生徒や制服の着こなしの乱れに気づかない生徒が見受けられる。	【成果指標】(生徒)生徒自身の意識が高まり、服装容儀・頭髪やマナーなどの向上に努めている生徒が多い。	積極的に服装容儀・頭髪やマナーなどの向上に努めた生徒が A 95%以上である。 B 85%以上である。 C 75%以上である。 D 75%未満である。	Dの場合は、服装容儀・頭髪、マナー向上に関する取組を再検討する。	7月、12月に調査
	③ 規則正しい家庭生活を送るよう指導することで、遅刻する生徒を減少させる。	生徒指導課 教務課 各学年	R5年度と比較しR6年度は微減したが、一人で複数回遅刻するケースが多くみられた。STや登校指導で遅刻防止の呼びかけを行い、遅刻に対する意識を高めていきたい。回数が増える生徒には個別に対応し時間を守る意識づけを行う。	【成果指標】(生徒)生徒の総遅刻数を過去5年間の平均と比べて減少させる。	総遅刻数が過去5年間の平均値と比べて、変化率が A 10%以上の減少である。 B 10%未満の減少である。 C 10%未満の増加である。 D 10%以上の増加である。	Dの場合は、遅刻指導に関する取組を再検討する。	毎月調査
				【成果指標】(生徒)遅刻をしない、遅刻を減らすように努めている生徒が多い。	遅刻をしない、減らすように努めている生徒が A 100%である。 B 90%以上である。 C 80%以上である。 D 80%未満である。	Dの場合は、遅刻指導に関する取組を再検討する。	7月、12月に調査
	④ 清掃の徹底により、学習環境の向上とさわやかで心豊かな学校生活の実現を図る。	保健相談課 各学年	清掃や整理・整頓により、校内環境美化の成果が上がっている。改修工事が続き、清掃、整理整頓が難しい中での生徒意識としては十分向上している。	【成果指標】(生徒)生徒自身の環境美化への意識が高まり、整理整頓に努める生徒が多い。	積極的に教室内の整理整頓に努めた生徒が A 95%以上である。 B 90%以上である。 C 85%以上である。 D 85%未満である。	Dの場合は、清掃に関する取組を再検討する。	7月、12月に調査
⑤ 生徒の良好な人間関係づくりを支援して、いじめ等を防止し、不安なく充実した学校生活を送れるようにする。	保健相談課 各学年	自分の思いを表現することが苦手で、生徒間や教員とのコミュニケーションがうまくできない生徒がいる。	【満足度指標】(生徒)学校生活が充実している、楽しい、と感じている生徒が多い。	学校生活に概ね満足している生徒が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	Dの場合は、心の教育等の取組の充実を検討する。	7月、12月に調査	

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
2 授業の工夫・改善と生徒の希望進路の実現。 (やる気を高める授業の実践、GIGA スクール構想の推進、体力の増進、生徒の進路意識の向上)	① 教材・教具や指導方法を工夫して生徒の興味・関心を引き出し、やる気を高める授業を行うよう授業改善に努める。	教務課 各教科	I C T機器を有効活用し、生徒の学習意欲を高めるような授業改善をすすめる必要がある。	【成果指標】(生徒) 授業において、生徒の興味・関心を引き出し、やる気を高めるため、I C T機器の活用や授業方法の工夫を積極的に行う。	わかりやすく学習意欲を高める工夫が感じられると答える生徒が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	Dの場合は、授業改善の取組を再検討する。	7月、12月に調査
	② G I G Aスクール構想の推進を図る。	教務課 各教科	個別最適な学びを行うため、一人一台端末の有効な活用を推進し、授業の振り返りや自分の考えをまとめる場面での活用など効果的な活用方法を共有、研究する。	【成果指標】(教員) 平常の授業、ホームルーム、部活動等での活動でクロムブックを有効に活用している。	生徒がクロムブックを有効に活用できていると答える教員が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	Dの場合は、方法を検討する。	7月、12月に調査
	③ 生徒の体力向上に努め、たくましい人間づくりに取り組む。	体育管理課	全体を通して、前年度の自己記録を超えた生徒が増加している。一部の女子において体力の低下がみられた。	【成果指標】(生徒) 新体力テストの結果において、前年度の記録を超える生徒が増えている。	前年度の自己記録を超えた生徒が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	Dの場合は、体力増進に関する取組を再検討する。	5月に調査
	④ 個々の進路希望に沿って丁寧な支援を行い、確実に進路希望の実現を図る。	進路指導課 第3学年	令和6年度の卒業生は進学・就職希望者全員が進路を決定した。多様な進路希望に対応するために組織的な指導体制と生徒一人一人に対するガイダンスの充実が求められる。	【成果指標】(生徒) 全員の生徒が希望の進路に内定・合格し進路を決定する。	進路決定率が A 100%である。 B 95%以上である。 C 90%以上である。 D 90%未満である。	C・Dの場合は、進路指導に関する取組を再検討する。	年度末に集計

重点目標	具体的取組	担当	現 状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
3 部活動・生徒会活動の効果的、計画的な実践と地域社旗と連携した活動の推進および速やかな情報発信（全国大会での上位入賞、地域活動の推進、情報発信）	① 県内トップレベルの競技力を維持し、全国大会に出場できる各種トレーニングや実技指導を行う。	体育管理課 生徒会課 各部顧問	令和6年度は6部が全国大会出場を果たした。この結果を維持、向上させていく。	【成果指標】（生徒） 全国大会に出場する部活動の数が多い。	全国大会に出場した部活動が A 8部以上である。 B 6部以上である。 C 5部である。 D 5部未満である。	Dの場合は、練習方法等を再検討する。	年度末に集計
	② 部活動を計画的に実施し、科学的な理論に基づき効率的・効果的に生徒の技術向上を図る。	体育管理課 生徒会課 各部顧問	部活動の実実施計画において、鍛錬と休養のバランスを取り、より一層科学的な理論に基づいた計画を立てる必要がある。	【成果指標】（生徒） 日々の部活動は計画的かつ科学的で充実していると答える生徒が多い。	部活動が計画的かつ科学的で充実していると思う生徒が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	Dの場合は、休養日を増やすなど部活動計画を再検討する。	7月、12月に調査
	③ 生徒会執行部の企画力・実行力を育み、活動を充実させるとともに、各種の行事を成功させ、学校生活の充実を図る。	生徒会課 各学年	生徒会活動は、文化祭がメインと考えている生徒が多く、挨拶運動や委員会活動など日常の活動の理解が、まだ不十分である。	【成果指標】（生徒） 生徒会活動が活発に行われていると答える生徒が多い。	生徒会活動が活発に行われていると思う生徒が A 75%以上である。 B 65%以上である。 C 55%以上である。 D 55%未満である。	Dの場合は、生徒会活動の在り方を再検討する。	7月、12月に調査
	④ 様々な地域活動（ボランティア等）に参加する生徒を増やし、社会貢献の必要性、他者と協働する意識を高める。	生徒会課 各学年	生徒会が呼びかけたボランティアのみがボランティア活動であると捉え、活動自体を狭くとらえている生徒が多い。	【成果指標】（生徒） 地域活動（ボランティア等）の意義を理解し、様々な地域活動に参加する生徒の数が増えている。	様々な地域活動（ボランティア等）に参加したと答える生徒の割合が A 60%以上である。 B 50%以上である。 C 40%以上である。 D 40%未満である。	Dの場合は、地域活動（ボランティア等）の意義を理解させる取組を充実させる。	7月、12月に調査
	⑤ 学校通信（校内、地域）の発行やHP・学校メール配信により部活動や生徒会活動の様子などをきめ細かく発信する。	総務課 各部署	令和6年度の保護者アンケートでは、満足度が85%であった。ホームページの更新がされていない各部署がある。	【充実度指標】（保護者） 学校からの情報発信内容に対して充実していると感じている保護者が多い。	学校のHP・学校通信の内容や学校メールの発信内容が充実していると感じている保護者の割合が A 85%以上である。 B 75%以上である。 C 65%以上である。 D 65%未満である。	Dの場合は、取組について再検討する。	7月、12月に調査

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	備考
4 教職員の時間外勤務を削減することによる教育活動の充実。(効率的な業務の推進)	① 教職員のワークライフバランスの実現に向けて、校務の効率化に取り組み、時間外勤務の削減を図る。	各部署	令和6年度において時間外勤務が月80時間以上の職員は延べ人数(4~12月集計)で10名であった。 【参考】12月集計 R5年:80時間以上22人 R4年:80時間以上24人	【努力指標】(教職員) 月80時間以上の時間外勤務のある職員が減っている。	月80時間以上の時間外勤務のある職員の延べ人数が A 0人である。 B (月数×1人)以下である。 C (月数×2人)以下である。 D Cを上回る。	Dの場合は、業務割当の平準化を再検討する。	7月 (4月~7月の4か月) 12月 (4月~12月の9か月)に調査
			一昨年の半数となり、年々減少している。今後も計画的な部活動指導、各課、学年での業務の割り振りを工夫して効率化に努めたい。また、定時退校日を意識して計画的に日々の業務を行うよう働きかけ、意識を高めていく。	【努力指標】(教職員) 教職員一人一人がタイムマネジメントを意識した働き方をしている。	(全教員)タイムマネジメントや業務の効率的な推進を意識した働き方をしていると答えた教職員の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	Dの場合は、業務改善の取組内容について再検討する。	7月、12月に調査